

校名：宮城教育大学附属小学校

所在地：〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉6丁目4-1
電話番号：022(234)0318

記載日：平成28年5月20日

記載者：堀之内優樹

記載者役職：主幹教諭

本校の校風、おおまかな特色

本校では、教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」のもと、教育活動に取り組んでいる。

運動会や様々な場面において、たてわり活動等を活用することで、集団の中で関わり合いながら、自らを高めていく子供の育成を目指して教育活動を展開している。12月には市内のホールを会場に合唱の会を開催している。学級合唱、学年合唱、全校合唱、職員合唱で会を構成しており、全校で表現を楽しむ場となっている。

また、韓国大邱大学、アメリカ・ハワイ大学と本学が姉妹提携をしており、交流を視野に活動を展開している。ユネスコスクールにも認定されており、持続可能な教育活動にも取り組んでいる。

教師自身もイノベティブ・ティーチャー（生涯にわたって自ら学び続ける教員）を目指し、互いに授業を見合い、意見を交換しながら授業づくりに取り組んでいる。このような姿勢は、地域の研修会や大学講義、教育実習等を通じて、多くの先生方や将来教師を目指す学生にも伝えていくようにしている。



【力強く！ なかよし運動会】



【美しい歌声を 合唱の会】



【ハワイ大学との交流】

本校の卒業生の活躍状況

卒業生の中学校進学先は小学校で把握しているが、その後の進路について追跡調査は行っていない。卒業生と連絡を取り合ったり、卒業生が来校したりした際に情報を得ることがある。

また、同窓会での関わりの中で卒業生の活躍を確認しているが、情報としてまとめることはしていない。

本校勤務経験者の教員の公立学校・教育委員会などでの活動状況

本校勤務経験者名簿を作成しており、年度ごとに情報を更新している。その情報は本校で管理している。名簿には大正7年在籍から現在在籍している職員を登載するとともに、物故者についても名簿に記録している。

魅力や特色のある取組 今後、公立学校にも展開できそうな先導的な取組

- 3年生の総合的な学習の時間において、仙台の祭りをテーマに「仙台七夕」に取り組みさせている。追究段階において、外部講師を継続的に活用し、仙台七夕の由来や飾り一つ一つの意味等の解説をしていただいている。また、児童が製作した七夕飾りは仙台市街で行われる仙台七夕、学校周辺の地域商店街で行っている宮町七夕に飾る等、**地域の祭りに継続的に参加**している。



【仙台七夕の歴史に触れる】



【七夕飾りを作ろう！】



【アーケードに飾り付け】

- 小学校英語教育**に長く取り組んできた。現在は文部科学省英語教育強化地域拠点事業の指定を受け、小学校から高等学校の一貫したカリキュラムづくりに取り組んでいる。定期的に授業を公開することによって、情報を発信できるようにしている。



【What are you doing?】



【ALTの先生と一緒に】



【JICA訪問の機会を生かして】

- 同窓生を招いての特別授業**を毎年行っている。音楽鑑賞や講演会など、特別授業の分野は様々である。同窓会の力も借りながら取り組んでいる。

子供たちが自分たちの先輩の活躍する姿に触れ、自分の夢を膨らませたり、知らない世界に触れたりする機会となり、キャリア教育にも寄与する取組であると言える。

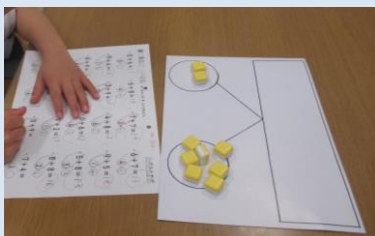


【チェロ奏者の先輩を招いて】

- 上杉学習支援室（愛称：さぽーとルーム）を設置し，支援が必要な児童に対する情報を蓄積するとともに，幼稚園から中学校まで一貫した支援ができるような体制を整えている。また，教師に対するコンサルテーション，保護者の教育相談を行う役割も果たしており，特別支援教育に関する共通理解や情報共有していくことに有効に働いている。

さぽーとルームの八つの取組

- ① 特別な教育的ニーズのある子どもたちへの通級による指導（個別指導）
- ② 教員へのコンサルテーション（指導助言）
- ③ 保護者との教育相談
- ④ 保護者向け特別支援教育セミナー「サテライトすぎのこ教室」の開催
- ⑤ 附属四校園の特別支援教育コーディネーターとの連携
- ⑥ 大学教員，作業療法士，言語聴覚士，スクールカウンセラーとの連携
- ⑦ 外部機関（医療機関，相談機関，児童相談所等）との連携
- ⑧ 附属四校園特別支援教育研修会の企画運営



【通級による指導】



【附属特別支援学校の地域支援
コーディネーターとの連携】



【教員へのコンサルテーション】

- 栄養教諭を中心に，食育の充実を図っている。各学年での取組も継続して行っている。2年生では，グリンピースのさやむき，3年・トウモロコシの皮むき，4年・魚食の一環として養殖の鯛をさばく等の取組の後には，その食材を実際の給食で使い，料理として子供たちが食することができるようにしている。5年生が家庭科の授業で考えた味噌汁も給食として具現化することもある。さらに，5年生でのマナー給食，6年生でのバイキング給食の取組も行っている。その他，食材や料理の説明を載せたおたよりを毎日配付し，食への関心を喚起するように努めている。



【グリンピースのさやむき】



【養殖の鯛はどっちだろう？】



【食事のマナーを学ぶ】

- 学校文集を毎年作成している。一人一人の作品に担任がコメントを載せる形で作成し，県の文集展にも出品している。

地域における本校の存在

公開研究会やその他授業公開，研修会等を行っていることから，先進的な取組を行っており，地域に情報を発信している研究学校という存在と考えられている。



【公開研究会】



【ICT 機器を活用した授業】



【道徳・英語の教科化に向けた実践の累積】

附属学校の存在意義、本校の存在意義

- 本校の児童選抜方法は普通教育妥当である児童を対象に抽選を行っている。多様な子供たちを本校児童として受け入れ，その中で授業研究を行っていくことで，公立学校に近い状況の中で成果を情報として発信することができる。
- 附属校園の組織を生かし，英語教育について小学校から高等学校までの一貫したカリキュラム開発を行っている。指導要領やその他教育現場での変化を先取りし，具現化した実践を公開等で発信することで，地域の先生方の取組に示唆を与えることができる。
- 基本実習の場として学生指導にあたり，公立学校での実践に向け，基礎・基本を学ばせる意義は大きいと考える。
- 教職大学院，キャリア育成オフィスと連携し，院生の実践研究の場として活用していくことで，相互の研究の深化を期待することができる。これは，子供の学びの充実にも関連していくとともに，院生が地域の現場に戻ることで，研究成果を広めていくことも期待できる。
- 本校教員が地域の学校と連携し，研修会や校内研究に関わっていくことで，地域の授業研究を進める機会をつくることことができる。

